博士論文

論文題目　**訳すのは「私」：ウラジーミル・ナボコフにおける自作翻訳の諸相**

学位請求者　**秋草 俊一郎**

現代文芸論専門分野における記念すべき初めての課程博士論文の公開審査が、2008 年 12 月 27 日に行なわれた。審査委員は、沼野充義（主査・現代文芸論）、野谷文昭（現代文芸論）、柴田元幸（現代文芸論）、長谷見一雄（スラヴ語スラヴ文学）、諫早勇一（同志社大学）、若島正（京都大学）の計 6 名。審査の結果、博士の学位を授与するに相応しい高い学術的水準の論文であると全員一致で認められ、2009 年 1 月 15 日の人文社会系研究科委員会において学位授与が正式に承認された。以下に、論文執筆者による要旨と主査による講評を掲載する。

付記：秋草俊一郎氏は、博士課程在籍三年次の途中で完成させた本博士論文を初めとする優秀な学業成績を評価され、2009 年 3 月に平成 20 年度第 2 回東京大学総長賞、さらに総長大賞を授与されました。

論文内容の要旨

訳すのは「私」：ウラジーミル・ナボコフにおける自作翻訳の諸相

秋草 俊一郎

バイリンガル作家ウラジーミル・ナボコフ（1899-1977）はロシア語と英語の二言語を用いて創作をおこなっただけでなく、自分のロシア語創作を英語に、英語の創作をロシア語に翻訳した。この “self-translation”（本論文では「自作翻訳」という訳語をあてた）が、ナボコフの創作活動を特徴づけているのはまちがいないが、それについては 30 年以上前にグレイソンのモノグラフが一冊あるだけで、以降あまりまとまった研究がされてこなかった。本論文では、サミュエル・ベケットやミラン・クンデラ、多和田葉子などもおこなったこのすぐれて現代的な現象である自作翻訳を用いて、以下の二点を考察することを目的としている。1、自作翻訳を通じて、ナボコフの作品について、あるいはナボコフという作家について理解を深めること。2、ナボコフにおける「自作翻訳」とはなにかを、緻密な比較対照によって検証すること。

序章、イントロダクションでは、ナボコフの自作翻訳がいかにおこなわれたのかについての基本的な情報、およびその特徴が整理され、グレイソンのモノグラフ *Nabokov Translated* をはじめ先行研究について長所と短所が検討される。その上で博士論文全体を貫く方針として、ナボコフの作品のロシア語版と英語版、どちらかがすぐれていると決めつけるのではく、両版を精緻に読み解き、それぞれの価値をそれぞれの文脈に求めること、原作と自作翻訳の比較をつうじて、ナボコフの作品の読みを深めることが確認される。

第一章「ナボコフの『自然な熟語』:『一流』のロシア語から『二流』の英語へ」では、熟語や慣用句の翻訳の問題を手がかりに、いくつかの作品において原作と自作翻訳を綿密に比較することでナボコフのロシア語文体について探求する。それにより、そのロシア語が一般に想像されているよりも、繊細な構造を持ち、それゆえ英語版との間に文体的な差異が必然的に生じてしまうことを論証した。また自作翻訳によって生じた英語版は、オリジナルのロシア語版にくらべて構造がわかりやすく、他言語に翻訳しやすいことを示した。

第二章「Before / After ホロコースト：『報せ』における二度の『翻訳』」は、ロシ

ア語時代の短編「報せ」を題材に自作翻訳の際に登場人物の一部に追加された姓に着目することで、翻訳におけるコンテクストの問題について考察した。そして姓の追加を手がかりに、英語作品「暗号と象徴」との比較も交え、作品が発表された当時の文化的・歴史的なコンテクストの問題を考察している。またこの章では、ナボコフ作品における時系列での特殊な影響関係について触れた。ナボコフの作品ではロシア語版が後の英語作品に影響を与え、それがさらにロシア語作品の英語版に影響を与えるといったことが起こりうる。ほかにも自作翻訳には「誤訳」が存在するのか、という問題にも言及した。

第三章「消えうせた杖と組みかえられたトリック：『重ねた唇』を解く」は、自作翻訳を利用して、作品に隠されている「トリック」をタイトルの通り「解いた」章である。ロシア語版と英語版のわずかな異同から、まず英語版に隠されたトリックがあぶり出され、それが「なぜ変更されなければならなかったのか？」と考えることでロシア語版にロシア語文法に即したトリックが巧妙にしくまれていたことが判明する。自作翻訳を用いることでトリック＝作品の読解に役だつことはもちろん、それぞれの版がおたがいにたいして解釈の強力な証明として機能するわけである。これに加えて作品論の方面からは、ナボコフにとって文学的な名声や名誉とはなにか、およびナボコフが作品にトリックをしかけた理由について考察している。

第四章「謎解き『ディフェンス』:モラルをめぐるゲーム」は長編『ルージンのディフェンス』とその英訳『ディフェンス』をめぐる作品論である。この小説には英語版においてひとりだけ名前を変更された人物がいるが(そしてそのことに先行研究では誰も触れていないが)、それがなぜかはこの小説全体を丁寧に再読しなければわからないしくみになっている。このほかに本章ではナボコフ作品におけるモラルの問題を扱っている。そのことで、この初期のロシア語作品と後期の英語作品『ロリータ』との関係性も見え、ナボコフの作品を広い視野で読むことの重要性が示される。

第五章、「リンガフランカ・オブ・『ロリータ』：ヘテログロッシア空間としてのアメリカ」は、英語版とロシア語版に共通して使われているはずのフランス語の扱いが両版において異なっているのはなぜか？という問題を通じて『ロリータ』の言語の問題にアプローチしていること、すなわち自作翻訳を理解するためには作品の精読が不可欠であることを示した。また、ほかの章で扱われる自作翻

訳がロシア語→英語というベクトルなのにたいし、『ロリータ』はナボコフの小説では唯一英語→ロシア語というベクトルの自作翻訳であり、その特異性から見ても博士論文でとりあげる意義があると思う。作品論の方面からは、前章に引き続いてモラルの問題を扱っているが、『ロリータ』の場合、それをかき消すように主人公ハンバートの残酷さが常に前景に配置されている点で異なっている。また『ロリータ』は「アメリカ」や「英語」が大きなテーマであることはよく指摘されるが、それがロシア語版と比較されることでより具体的に理解される。

第六章「Racemosa なしに：樹影譚としての翻訳論」はロシア人にはなじみの深い樹木であるエゾノウワズミザクラを、この植物にまったくなじみない英語圏で英訳する上でナボコフがとった特異ともいえるアプローチを彼自身の作品の中に追った章である。この章では、自作翻訳のみならずナボコフの「他作翻訳」の中でもっとも重要な『エヴゲーニイ・オネーギン』翻訳と注釈を中心に扱っているという意味では、本博士論文の中でも毛色がやや異なる。ナボコフの初期のロシア語詩から、ロシア語の短編及び長編、それらの自作翻訳による英語版、自伝の三つのヴァリアント、『プニン』や『アーダ』といった英語作品までを俎上にのせ、ナボコフの残したもっとも巨大な「作品」である『エヴゲーニイ・オネーギン』翻訳と注釈を中心にして、創作―自作翻訳―他作翻訳というダイナミズムの中でナボコフの作品像を再構成した。ナボコフにとって「いかに訳すか」は「いかに書くか」に直結する重要な問題だったことが示される。

終章、「訳すのは『私』」では、上記の章で得た考察をまとめ、それらの知見をえた上でこれからどのような方向に研究を発展させていくべきかについて簡潔に述べた。

補章、「ナボコフの『不自然な熟語』：『外化』から『異化』へ」では、第一章で扱ったロシア語作品における熟語の特殊な使用法における議論をもとに、英語作品における熟語の使用法ははたしてどうなのか、という問題を探求している。ナボコフの場合、英語作品を分析する上でもロシア語の知識は重要になってくる。この章では一部に、第六章でアウトラインを示した『エヴゲーニイ・オネーギン』翻訳と注釈を英語作品の解読に用いるという方法を使用している。またナボコフの英語作品におけるひとつの文体的な傾向を、翻訳論の文脈で使われている「外化 “foreignization”」というタームを用いて説明している。

資料編では、本博士論文を理解するために有益と思われるいくつかの資料を付

した。資料１として、ロシア語版の自伝である『向こう岸』のまえがきを。資料２として「ロシア語版『ロリータ』へのあとがき」を。資料３としてナボコフが独特な翻訳論を展開したエッセイ「翻訳をめぐる問題（プロブレム）:『オネーギン』を英語に」を。どれも本邦初訳であり、読者の便にかなうと信じている。資料４としてナボコフの自作翻訳一覧を。資料５としてナボコフの他作翻訳一覧を。資料６として本博士論文に収められた各章それぞれが発表された際に作成された英文レジュメを。資料７としてナボコフの創作・自作翻訳・他作翻訳の発表年代が一目でわかるように工夫した簡易年表を。資料８として書誌一覧を、それぞれ添付した。

旅立ちのために

沼野 充義

本論文は、ロシア語と英語の両方で執筆したバイリンガル作家、ウラジーミル・ナボコフ (Владимир Набоков / Vladimir Nabokov) の著作について、英語版とロシア語版の比較対照をもとに、特に「自作翻訳」(自分の作品を自ら他の言語に翻訳すること。ここでは共訳者がいる場合も含む) という側面に焦点をあてて研究したものである。

ナボコフはロシア出身だが、1940 年にアメリカに移住した後、主要な執筆言語をロシア語から英語に切り替え、英語作家として国際的な名声を得た。そのため従来、日本では「ロシア出身のアメリカ作家」として英米文学の専門家によって研究されることが多く、二言語にわたる創作・翻訳の全体像に迫るようなアプローチは稀だった。本論文はロシア語と英語の両方のテキストを丹念に読み比べ、自作翻訳における微細な異同や改訂にまで注意を払いながら、言語に関して極めて意識的な作家の創作方法の特質を解明している。

論文は序章と終章 (結論) のほか、6 つの章および補章・資料編から成っている。論文の本体を成す 6 つの章のうち、まず第一章は熟語レベルでの対照観察に基づき、ナボコフにおけるロシア語と英語の間の文体論的相違を明らかにしている。この章の美点となっているのは、ロシア語の慣用的表現をナボコフがどのように英訳したかをめぐる、いくつかの具体的な興味深い例についての分析である。たとえば秋草氏は、「孤独の王」で使われるиз-за его белой как луньглухоты (彼のチュウヒのように白い失聴のせいで) という表現を取り上げ、「チュウヒ (鳥の一種) のように白い」というロシア語の慣用句と、白―白髪―老齢―耳が遠いこと―綿、といった一連の連想が凝縮された形でここに織り込まれていることを指摘し、その英訳との比較を通じて、ナボコフのロシア語文体の独創性を明らかにしている。

また秋草氏は『ディフェンス』に登場する医師の目がагатовыйと形容されている点に着目する。これは本来「メノウの」を意味する形容詞だが、一般にгагатовый「黒玉の」「真っ黒な」とおそらく混同されたせいで、目や髪について

使われる場合は「真っ黒な」を意味する慣用的表現になっている。しかし、ナボコフはそれを英訳する際に agate と（おそらく）意識的に「直訳＝誤訳」することによって、医師の目に「メノウのような」変幻自在な貴石の特質を付与した、というのが秋草氏の推論である。

慣用的表現についてロシア語版と英語版の間に生ずるこの種の微細なずれは、辞書を丹念に引きながら両版をこつこつ読み比べないとなかなか気づかないようなことで、ロシア語ないし英語のネイティヴスピーカーであればすらすら読み進んでしまうため、むしろ気づかないで終わってもおかしくない。そういった点に分析のメスを入れることができたのは、ロシア語も英語も母語としない研究者による丹念な読みのおかげとも言えるだろう。

ただし、この種の翻訳の際にナボコフが示す言語感覚をあまりにも特別視するべきではない、ということも書き添えておきたい。慣用的表現を翻訳の際にどう処理するかということは、何もナボコフの場合のような自作翻訳の際だけでなく、他者によって書かれた文学作品一般の翻訳の際に翻訳家を日常的に悩ませるごく普通の問題だからであって、優れた翻訳家であれば、ナボコフが自己翻訳の際に示したのと同様の工夫を試みるものである。

第二章は短編「報せ」の英訳における姓の追加という一見些細なディテールから出発して、作品の歴史的文脈やユダヤ人問題へと論を展開する。特筆すべきは、ある意味ではロシア人読者にとってほとんど自明な点にわざわざ注目することから出発しているということであろう。主人公の女性の父称Исаковнаは、父親がイサークという名前であることを示しているが、ロシアではイサークは普通ユダヤ人を強く連想させる名前であるため、ロシア人の読者はその父称だけからほぼ自動的に、彼女がユダヤ系として設定されていることを了解する。しかし父称という習慣を持たない英語では当然のことながら、そのような了解は得られないため翻訳に工夫が必要になる（翻訳論でよく言われる compensation）。この点に着目して、作品のより大きな社会的コンテクストに論を展開した秋草氏の手腕は見事である。

本章では「報せ」が後に英語で書かれた「暗号と象徴」と対になっており、それぞれホロコースト前／後の作品として読めること、さらに「報せ」の英訳においてナボコフが時代設定を最初にロシア語版が書かれた 1934 年から、1935 年にずらしているのもひょっとしたら意図的なものかもしれない、といった極めて刺

激的な推論が提示されている。

ナボコフが芸術的創作においてユダヤ人問題にそれほど直接的にコミットしていたと考えるべきなのか、ナボコフのような作家の作品を解釈するためにそこまで社会的コンテクストを読み込む必要があるのか、疑問が残るとはいえ、この章の主張は鮮やかである。ここでさらに一歩踏み込んで言うならば、「報せ」の最後に描かれる、耳が遠いせいで息子の死の報せをなかなか理解できないでいる老いたユダヤ系女性の姿は、ホロコーストという恐ろしい災厄が迫っているにもかかわらず、それを理解できずにいつもと同じ日常生活を送り続けるしかない（鈍感な？）ユダヤ民族の状況を象徴したものとも考えられるはずだが、はたしてナボコフはそのような政治的予言をこの短編に託したのだろうか？

第三章は短編「重ねた唇」のロシア語原文と英訳の丹念な比較を通して、テキストに埋め込まれた仕掛けを発見した。その仕掛けとは注意深い読者でないとなかなか気づかないような「杖」に関するディテールである。つまりロシア語版では「杖」тростьが女性名詞であるという文法的特性を利用してそれを主人公の亡き妻アンナに緊密に結びつけているのに対して、文法的ジェンダーを持たないため同様の文法的仕掛けを用いることができない英訳では、杖への言及を増やす一方で、ある決定的な箇所で杖にわざと言及せず、杖を「消失」させている、というのが秋草氏による露英「交差精読法」による発見である。

確かにこの作品で「杖」というディテールが強調されているのは、多少なりとも注意深い読者であれば容易に気づくことだし、そのジェンダーに着目すれば、ここで「杖」がゴーゴリの『外套』における「外套」（やはり女性名詞である）に似た役割を果たしているかもしれないといった（やや通俗フロイト主義的な）解釈に至るのも、さほど困難なことではないだろう。しかし、ナボコフが「杖」のモチーフを巧みに使いながら、いかに緻密に小説を構成しているかを、ロシア語原文と英訳を対照しながら明らかにしたことは、オリジナルな発見として高く評価されるべきであるし、いわば「異界」への旅の伴侶としての杖をとるために主人公が姿を消すという小説の結末についての解釈も鮮やかで脱帽した。

第四章は長編小説『ディフェンス』のロシア語原文と英訳の双方を読み比べながら、小説の本当の主題が父子の関係の問題であるとする見方を提唱し、ナボコフ文学におけるモラルの問題へと視野を広げた。もっとも、このような主張にとって、ロシア語と英語のテキストの比較はじつはさほど大きな意味を持つとは

言えないだろう。この章の場合、ロシア語か英語か、どちらの版を一つだけ精読したとしても、ほぼ同様の結論に達すると思われるからである。それでも、例えば、ルージンのところにソ連からやってきた客の息子の名前が、ロシア語版のМитька「ミーチカ」から、英語ではIvanに変えられていることの指摘などは、些細な点とはいえ、本章にとって大きな意味を持っている(ついでながら、論文中で言及されていない語学的ディテールについて補足しておけば、Митькаは「ドミトリー」Дмитрийの愛称というよりは卑称であり、例えばナボコフ家のような良家では当時親が使うことは考えにくい。ここではこの卑称形があえて使われているのは、ソ連的な粗野さのしるしと考えられる)。

もっとも父子関係に焦点を当てようとする読み方が、はたしてそれほど独創的であるのか、またその結果得られた結論に十分な説得力があるかについては、多少の留保をつけざるを得ない。秋草氏は「小説のテーマはチェス」という先入観に読者が「ミスリード」された結果、本当のテーマである父子関係が見えにくくなっているという前提から出発しているようだが、少なくともロシア語で『ディフェンス』を読むと、主人公の父称は終始——最後にルージンが自殺するまで——不自然と思われるほど一貫して隠されており(当然父称が出てこなければいけないところでも、父称に言及することが執拗に避けられているため、ロシア人読者の中にははぐらかされたように感じて苛立つ者がいてもおかしくない)、ここでは父子の関係は冒頭からむしろなにやら不自然な形で前景化されていると考えるべきである。この不自然さは、父親に関する十分な情報の欠如という形で引き継がれ、結局のところ、例えば彼が本当に二流の作家であったのかどうかについてどう考えるにしても、憶測の域を出るものではないだろう。ルージンの自殺についても、父と同じパターンを繰り返すことを避け、妻を救うためであったという秋草氏の解釈は魅力的だが、チェスというゲームの枠内で考えれば、ルージンの自殺はまさに「一見禁じ手のように見え、可能な手からまったく自然に排除されていた」ものにほかならない。つまり父子のパターンもこの小説ではチェスのゲームのパターンと解きほぐしがたく絡み合っているのであって、「小説の主題はチェスではなく父子の問題」といった形で二者択一的に決めつけられるものではないと思う。

第五章は英語で書かれた長編『ロリータ』をナボコフ自身によるロシア語訳と比較しながら、作中に現れるフランス語の扱い方の違いを手がかりに、作品のモラルや作家のアメリカ観を論ずるための道を探った。誰の目にも明らかなこの章

の手柄は、英語版とロシア語版を丹念に比較して、英語に頻出するフランス語がロシア語訳でどうなっているか具体的に調べ上げ、差異が生じている場合、それがどうしてかを文脈に即して検討しているということである。そして英語版では、英語とフランス語の混用が主人公の二重性とヨーロッパ・アメリカ間の揺れを示しているのに対して、ロシア語版ではその二重性がうまく表現できないため、別の表現手段が使われている、という指摘は的確なものである。

ただし、この章全体の論旨をふまえて考えると、ここで大事なのは小説においてフランス語がどう機能しているかということ自体であって、それがロシア語訳でどう処理されているかという問題は二次的なもののように思える。フランス語の使い方が英露両版でどのように違っていて、その違いにどのような意味があるかを明らかにしたという点で、この章は十分優れた成果を挙げているとはいえるが、それは『ロリータ』という大きな作品の英露自作翻訳という大きな探索領域のごく一部をカバーしているに過ぎない、という注文をつけておきたい。

さらに無いものねだりをもう一つするならば、フランス語の使用を問題にする以上、ここで用いられている様々なフランス語表現に関する文体論的考察をもっと洗練させ、深める必要もあるのではないだろうか。工藤庸子氏のようなフランス文学の専門家による「『ロリータ』の〈フロベール的イントネーション〉について」という画期的な論考（同氏著『砂漠論　流動する人文学』所載、左右社、2008年）がすでにあるだけに、なおさらである。ただし、そのためには当然のことながら、フランス語フランス文学に関する高度な専門家レベルの知見が必要なので、ここまで一人の研究者に求めるのは無理な話かもしれない。

またロシア文学史の立場から言うと、ガリシズムやロシア語本文におけるフランス語の混在は18～19世紀のロシア文学で顕著な傾向の一つであり（トルストイの『戦争と平和』を思い出していただきたい）、文体論的な研究の蓄積もある。こういった古典的ロシア文学の場合とナボコフの場合とを比較したらどんなことが言えるか、ナボコフのフランス語使用の特徴が何か浮かびあがってくるのか、といった視点もあれば、論がもっと広がったことだろう。

なお秋草氏は『ロリータ』におけるフランス語使用全般を広義で「便宜的」にガリシズムと呼ぶことにすると断っているが、これはロシア語の文体論でいう通常のガリシズムからずれるので、やはりもっと正確な別の言い方を考えたほうがよかった。ガリシズムとは普通「フランス語風の言い回し」「フランス語から借用さ

れた言い方」のことであって、フランス語そのものの使用のことではないからである。

第六章はロシア語の植物名черемуха「チェリョームハ」(和名エゾノウワミズザクラ)の英訳をとりあげて考察した。個人的にいうと、これは私がもっとも好きな章で、ある意味ではこの博士論文の白眉とも言える。出発点はこれまた新発見の事実ではなく、ナボコフの『オネーギン』注釈にナボコフ自身が詳しく書いているチェリョームハに関する解説である。だから、ナボコフ研究者にとっては周知のことから論が始まっているわけだが(それが新発見のことにように新鮮に見えるとしたら、一つには、『オネーギン』注釈がその重要性にもかかわらず、きちんと読まれておらず、『オネーギン』のロシア的背景について日本の読者が無知なままだということがあるだろう)、その先の展開には目覚しいものがある。

秋草氏は、チェリョームハという単語を英訳するためにナボコフが長年にわたって重ねた努力を追いながら、結局、ナボコフの作家としての生涯と彼にとってのロシア像を描き出すことになった。あちこちから例が引かれるままに議論が展開し、通常のアカデミックな論文としてはややまとまりがないとも言えるが、一つの単語を主軸に一種の評伝としてもっとも文学的に読ませる章になっている。ナボコフは結局、チェリョームハを英訳するのに racemosa という新語を作ってしまったわけだが、本章は最後に『アーダ』にもその単語が現れることを指摘しながら、「故郷から離れること 50 年、帰還はならなかったが、ナボコフは自身の空想上の楽園に “racemosa” を植樹することに成功したのだった」と結ばれる。亡命作家の生涯を要約するこの見事な結末には感嘆あるのみ。これはむしろ、「チェリョームハをめぐるナボコフの冒険」とでも呼ぶべき物語ではないか。

以上、章を追いながら、講評を述べてきたが、最後に研究の方向性について触れておきたい。第三章のタイトルにも顕著なように、秋草氏は最初、ナボコフのテキストと格闘しながら(最初のうちはおそらく辞書を引きまくりながら)、精緻に組み立てられたテキストを、まるでパズルを解くように読むことに無上の喜びを感じたのではないかと思う。しかし、トリックやパズルだけだったら、文学作品としての価値はどうなるのか、という疑問に突き動かされて、次第にモラルの領域に探索を広げていった。その成果が第四章であり、また第五章もフランス語使用というテキストの細部に拘泥しているようでいて、作品におけるモラルの

問題（ハンバートの人間性、生身の人間としてのロリータ）になんとかつないでいこうとしていることがよくわかる。しかし、モラルの問題が、作者と読者の間の「ゲーム」として提示されると（第四章）、今度は、読者の問題が浮上してくる。ナボコフの読者とはどんな存在であるべきなのか。また読者にゲームを仕掛け、読者に難解さの負荷を与え、読者を試そうとする作者という存在はいったい何者なのか。

このような研究の方向の変化を見守ってきた評者には、若き研究者がまるで最近のナボコフ研究の進化の道筋を、まるで高速の早送りで繰り返して成長してきたように見える。つまり、言語的な仕掛けやゲーム性、メタフィクション性、インターテクチュアリティ、ナラティヴの構造といった形式的・手法的側面への注目に始まった研究は、作家を華麗な技巧を駆使する現代小説の旗手として祭り上げたけれども、ヴラジーミル・アレクサンドロフによって切り拓かれた「別世界」というモチーフから、ナボコフにおける形而上的なものへの探索が始まる。しかしやがて「別世界」が流行りすぎて、陳腐な形で神秘主義的な方向に堕しかけると、今度は新たに（じつは古い）モラルの問題こそがナボコフの本質ではないか、というアプローチが出てくる――こういった流れを秋草氏はおそらく若き身で受け止め、自分でそのすべてを追体験しながら、その先を考えようとしてここまでやってきた。その成果報告がこの論文である。さらに補章では、現代欧米の翻訳研究 translation studies の議論を踏まえ、現代の様々な越境的作家と比較するような視野の広がりが出てきて、いわば「現代のクラシック」ともいえる存在のナボコフをもっと現代的な文学の場につないでいこうとする姿勢も感じられる。このあたりのことは、新しくできたわれわれの「現代文芸論」という場の刺激を多分に受けた成果でもあるだろう。

この論文がいやおうなしに突きつけてくるのは、ナボコフは英語でもロシア語でも読むべきだ、二つの言語を比較しながら読んだほうが作品世界がはるかに面白く、はるかに豊かになる、という単純で否定しがたい事実である。ここで秋草氏が提唱するロシア語と英語の「交差精読法」の実践例に関しては、まだ初々しいビギナーズ・ラックというようなものも散見されるけれども、興味深い発見を次々に重ねていくその serendipity は、才能だけではなく地道に重ねられた努力の賜物でもある。

もっとも本論文ではテキストの細部の読解に際して語学的に不正確な点も散見

されるので、この「交差精読法」をさらに有効に使っていくために、今後さらに文体論的分析の精度を高める必要があることは否定できない。また自作翻訳という主題については、従来の翻訳研究全般の蓄積を踏まえて、さらに広い視野から理論的に位置づけていく努力も求められる (特にロシア・ソ連において蓄積されてきた翻訳の技術と理論については、ロシア語がせっかく読めるのだから、もっと参照してほしい)。しかし、本論文はロシア語版・英語版の比較対照を通じて、従来の作品解釈に変更を迫るような数々の新発見をもたらし、ナボコフの自作翻訳が決して副次的なものではなく、独自の価値をもったテキストとして研究に値することを明確に示した点で画期的である。

以上、無いものねだり的な注文もあえてたくさん盛り込んだが、ヴラジーミル・ダーリにならって、これから大きな旅に出ていく若き研究者へのнапутное слово (門出を祝う、旅立ちのための言葉) としたい。